

第55号

平成25年

6月

HPに創刊号から  
連載中

# もう一つの道

情報は、うのみにせず、注意深く徐々に試してください。

山田整骨院

熊本市中央区出水 4-25-1

096-364-7611

<http://yamadasu.com/>

熊本交通事故, 山田整骨院

検索

<http://www.jiko-kumamoto.net/>

## 第一回学祖顕彰祭記念講演

昭和38年 2月号 月刊西医学

色体生物学と生死 大久保 寛

われわれが生きているということは、結局においてラジエーションまたはラジアシオン (**Radiation**) すなわち、これを放射とか輻射とか名づけており、死ぬことはエマナチオン (**Emanation**) これは流出とか放流と名づけている。この両者が対等の比を保っているか否かにあります。

**Radiation**(放射・輻射) 100 80 95 90 65

**Emanation** (流出・放流) 100 120 105 110 135

生体はこの二つの現象が働いている細胞が 100 生きる (放射) 力の物質と 100 の死ぬ (流出する) 物質が、ともに等分になれば健康であるのです。いいかえますと、ラジエーションすなわち生きる力が 100 とエマナチオンすなわち死ぬ力が 100 と対等になれば、人間は健康で生きていけるのです。しかるに人間は、とかく自然生活を離れた生活をしているものです。皮膚は着物でおおわれ、着物によって光線を遮断してしまうから、ラジエーションを妨げエマナチオンをより余計にして、ラジエーションの 80 に対して、エマナチオンを 120 にしたり、もっとひどいものになりますと、生死の境まで差を作ってきます。その生死の境はどこかといいますと、ラジエーションとエマナチオンが 100 と 100 であれば正調であり、それが次第に両方の対等の比を割り、95 と 105、90 と 110、65 と 135 というようになりますと、すなわちラジエーションが 65 になって、エマナチオンが 135 になったときが、生と死の境だと論じられており、そのことは生物学の研究で判然としております。エマナチオンはわれわれにとりまして、ときに必要であります、多くなつてはいけなないのであります。

死んだエマナチオンはどこから放出されるかといいますとそれは大便、尿、皮膚、口から出しているのです。ラジエーションとエマナチオンを 100 と 100 に保つことが保健法であり、また予防医学なのであります。しかも人工的ラジエーションを繁殖させるためには生食を大いにやることです。

1月の昼の光線は多分に緑を受けており、その波長は5200ミリマイクロンぐらいあります。夕方の夕日の赤い光線は約8000ミリマイクロンであります。昼食にりんごとか、柿、赤身のさしみなどを無条件で食べます

と8000ミリマイクロンの光線の波長を与える食物が腹中に入ることになって昼の緑の波長と一致しないから、いけないわけです。まだ年若くして、どんどん育っていく人にはまだよいとしましても、病気にかかっている状態の人が、こういう色帯の食物の摂り方をすれば、かえって衰弱におちいることになります。発育盛りの二十歳以下の人々にはかまいませんが、それ以上の年令の人々には夕食に紫色や緑色の食物をたべますと夕方ですから、8000ミリマイクロンの波長を出しているの、それと一致しないわけですから病弱になるわけです。われわれはつねに宇宙の影響を受けている身体ですから、色帯生物学を無視することはできないのであります。茄子だとか紫蘇などは3500から4000ミリマイクロンの波長であるから、夕食時に食べても、夕景の8000ミリマイクロンの波長の半分ぐらいの波長のものでは、8000ミリマイクロンの光線がおきないから、結局は栄養不良になるわけです。では、どうしてもそれを食べたいときはどうすればよいかと申しますと、それには夕食時には調理場に赤い電球を応用し、昼食時には緑色の電球を使用して、その波長の光線を放射浸透させるようにすればよいのであります。もし朝食を摂る家庭では紫色系統の電球を利用すればよいわけです。こうすることにより、ラジエーションを起こす光線は余計にできますしエマナチオンの方は小便なり大便によって出てしまいます。また皮膚からもガスとして出るわけです。ですから出易いように薄着の習慣をできるだけつけるべきです。とにかく、以上申しのべましたような方法でできるだけ生食をやって、そのときそのときの、光線を吸収しますならば、ラジエーションを發揮する一方エマナチオンは体外に流れ出ていくわけです。しかるに、旧態依然として、その域を脱しえないようなカロリー説はやがて亡びることになりましょう。(各季節による太陽スペクトルの配分表は西先生の「西医学健康原理実践宝典」によって承知せられたい。)

## あ　と　が　き

筆者は西勝造先生のお弟子の一人です。昭和38年当時、全国でグループ毎に非常に高いレベルの西医学の研究をしていました。この講演の内容も大変高度です。理解の一助に、西医学健康原理実践宝典より引用したいと思います。色彩療法（光線応用）生命エネルギーは、大部分太陽光線によって与えられるが、太陽光線は、次の三部から成りたっている。即ち主として化学的作用を起こす紫外線、主として熱学的作用を呈する赤外線、及びその中間に、普通のスペクトルによって捕えられる可視光線を含んでいる。生物は、これらの光線の直接、間接の照射、並びにこれらの光線を吸収蓄積せる食物の摂取によってその活動エネルギーを獲得するものである。従って日光は、人間の健康上にも重大関係を持っているわけで、以下略。本文中に生食という言葉が出てきますが、もう一つの道19号と31号に説明がありますので、参考にしてみてください。